

「わかること」と「わからないこと」

— 古代文学を研究するために —

池原陽 斉

書店をめぐるのが趣味である。いろいろな本に目がとまり、ついつい長居してしまうことも多い。そして、ある程度の規模の書店を散策していると、文庫や新書の帯に「古代史に謎はない」という類の惹句を見かけることがままある。古代文学研究者の端くれである方がこの手の文句に過剰に反応しているくらいもあるが、その点をさっぴいても、けっこうな点数の「古代本」が刊行されている。

なかでも『萬葉集』をとりあつかう「古代本」の数は多く、この歌集の制作意図などをごとこまかに説明する本も少なくない。こういった本は『萬葉集』を隅々まで説明していくが、そんな簡単に、千三百年ほど昔のことを詳らかにできるのだろうか。そのあたりを『萬葉集』を代表する歌人・柿本人麻呂に即して述べてみたい。

さて、こういった検証をおこなう場合、取りあげる材料はでわかることはくわずかだが、『Wikipedia』で「柿本人麻呂」を引いてみると、その身分についてつぎのように書かれている(二〇一四年一月七日二十時十分版)。

- 死去に関しては、三位以上は薨、四位と五位は卒、六位以下は死と表記することとなっているが、『萬葉集』の人麻呂の死去に関する歌の詞書には「死」と記されている。概説書にもよく見られるこの記述は、『萬葉集』巻二の挽歌部におさめられた以下のような題詞にもとづいて書かれていると目される。
- ① 柿本朝臣人麻呂在<sup>三石見国</sup>臨<sup>レ</sup>死<sup>・</sup>時自傷作歌一首
  - ② 柿本朝臣人麻呂<sup>・</sup>時妻依羅娘<sup>子</sup>作歌二首

①は二二三番歌、②は二二四〜二五番歌の題詞である。二例とも人麻呂の死を「死」と表記しており、「親王及び三位以上は薨と称せよ。五位以上及び皇親は卒と称せよ。六位以下、庶人に達る<sup>いた</sup>までは、死と称せよ(養老令・喪葬令)」という規定に照らして、人麻呂は下級官人とみるのは通説であろう。

しかし「Wikipedia」をよく読んでみると、上記の説明に対して以下のような注が附されていることに気づく。

『萬葉集』巻第三には大津皇子の辞世とされる歌があるが(四一六番)、その詞書には「大津皇子の死(ころ)されし時に(以下略)」とある。死の直前には身分に関わりなく「死」の字を使い、その人物の死亡が間違いない時点で「薨」や「卒」を使ったと見られる。人麻呂の場合もその詞書に

きるだけ一般性のたかい方がよいだろうから、あえてインターネット環境があれば誰でも利用することができるフリー百科事典「Wikipedia」を例にとってみよう。

後世「歌聖」と称される柿本人麻呂だが、知名度に比してその実績はほとんど不明といっている。この歌人の編んだとおぼしい「柿本朝臣人麻呂歌集」所収歌が『萬葉集』に引かれており(巻十・二〇三三番歌)、その左注にみえる「庚辰年」が六八〇年を指すことから、天武天皇の時代に出仕していたことは確実である。

しかし、この年に幾つで、どのような立場にあったのかは判然としない。また、持統稱制三年(六八九)に死去した皇太子・日並皇子尊(草壁皇子)への挽歌(巻二・一六七〜一七〇)あたりを皮切りに、天皇・皇族への献歌が顕著となるが、そこにいたる経緯もよくわかっていない。

「死に臨みし時に」とあり、この「死」の字のことをもって人麻呂が六位以下であったかどうかは判断できない。

注記というよりも、人麻呂下級官人説に対する反論といっている内容となっている。編集自由のフリー百科事典の本領発揮といったところか。梅原猛『水底の歌 柿本人麻呂論』(新潮社・一九七三)に代表される人麻呂高官説・刑死説を擁護する意図で書かれた注記とみていいだろう。「判断できない」といながら、ある方向への誘導を意図している。

引用文中に見える大津皇子は天武天皇の皇子。大宝律令以降の規定に照らせば「薨」と表記されるべき親王に相当する。この皇子が朱鳥元年(六八六)に謀反の罪で賜死したこと、『萬葉集』巻三にこの皇子の最期が「大津皇子被<sup>レ</sup>死之時」(巻三・四一六題詞)と表記されていることも事実である。

しかし、この説明は大事な点を見過<sup>こ</sup>している。それは、大津皇子は『日本書紀』をはじめ、複数の資料によって謀反の罪を犯し賜死したことが確認しうる人物だということである。右の題詞が、謀反という歴史的事件のかねあい「死」と書かれていることは無視しえない。

一方、柿本人麻呂の来歴を語る資料は『萬葉集』以外には存在せず、大津皇子のように謀反という事実から論をスタートさせることはできない。人麻呂が六位以下であったことを疑う見方は、資料にない人麻呂刑死説をなせば自明のものと考えるところとなりたっているのだろうが、推論が資料と同等の価値を持

たないことはいうまでもない。

しかも四一六番歌の題詞が「被<sub>レ</sub>死」、つまり大津皇子が殺されたことを明記するのに対して、人麻呂のそれが「臨<sub>レ</sub>死」としかないことにも注意をほらうべきである。「萬葉集」の題詞は人麻呂の死を強いられたものと見ることを拒否する。

この題詞の事実性には疑問もあるが、大津皇子の「被<sub>レ</sub>死」と人麻呂の「臨<sub>レ</sub>死」という題詞の情報が等価ではないことはたしかで、大津皇子の「被<sub>レ</sub>死」は、人麻呂が六位以下の下級官人でなかったことを証する材料とはいえない。

また、天皇や皇族に多くの讃歌・挽歌を献じている人麻呂が下級官人であったはずがないという類の記述も「古代本」には少なくない。しかし、おなじく天皇に献歌をなした彼の後進たち、たとえば山辺赤人や笠金村がいずれも史書に名をのこさぬ卑官であること——「宮廷歌人」田辺福麻呂が造酒司令史という卑官であったことは、「萬葉集」巻十八・四〇三二番歌の題詞に明記されている——などを念頭におけば、人麻呂も同様である可能性は決してひくくはない。「Wikipedia」の注記のような、下級官人説への反論は無効である。

しかし、その一方で同時代資料に一切の記述がない以上、人麻呂の具体的な身分はわからない。持統・文武朝に仕えた下級官人であり、主として藤原京の時代に天皇や皇族への献歌を多くなした歌人というあたりを、論証しうる人麻呂の実像と考えておくほかない。これ以上の穿鑿は、資料にもとづかない想像

に陥る可能性をなしとはできない。

古代文学を研究していると、よくよく「わかること」より「わからないこと」の方がはるかに多いことを痛感する。人麻呂だけでなく、額田王も、高市黒人も、赤人も憶良も、高橋虫麻呂も、肝心なことはほとんどわからないといつていい。

『萬葉集』自体も隅々まで解明されたとは、また解明しうるともいえない歌集である。この歌集がどういう意図で編まれたのか、何時ぐらいに完成したのか、公刊はどのような事情でなされたのか。雄弁に語る書籍は少なくないが、本当のところは謎の部分の方が多い。それでもわずかな残滓を頼りに、ひとつでも「わかること」を増やしていく、それが古代文学研究の醍醐味だろう。

もつとも、「わからない」古代文学を研究していると、ともすると考えを飛躍させたくなることもある。「こう考えた方がおもしろい」と思いついた場合にはとくに。そんな折に思い返すのが、以下のような記憶である。

大学院に進学したばかりのころ、古典語研究で知らぬひとのない大家の講演を拝聴する機会に恵まれた。幾許かの新幹線代を惜しみ夜行バスで出かけた結果、体の節々は悲鳴を挙げていたが、そんな苦痛は名調子をまえにすぐ吹きとんだ。片言隻句も聞きもらすまいと、メモを取りながら伺った。

多くのことを学んだ小一時間だったが、ここでその逐一を振り返ることはできない。正直、記憶があやふやになっている部

分もある。しかし、その大家が講演の最後をこう締めくくったことだけは、今でもはっきりと覚えている。自身の数十年におよぶ濃密な研究生活を振り返って、氏はこう断言した。

「わからんもんはわからん！」と。

もちろん、その道の極に達した大家だからこそ許される発言ではあろう。若輩の身で口にするれば、「もういっぺん勉強しなおしてこい」とお叱りを喰うこと必定である。

しかし、古代文学の資料がピースの缺けたパズルのように断片的であることは事実である。完成予想図の絵柄が個々人の判断によって異なることも避けられない。そこを想像で乗り越えていくか、「わからん」と諦観するか。お叱りを覚悟で放言すれば、どうもわたしは「わからんものはわからん！」に左袒したい性分であるらしい。「Wikipedia」はもちろんだが、通説にも首をひねりつつ、書をめくる日々を過ごしている。

— いけはら あきよし・文学部非常勤講師 —